43　福田邦三　　戦後看護界出来事誌
5.東京大学医学部衛生看護学科の発足
衛生看護学科のできた頃
看護 36（14）　126-130　　1984

連載

戦後看護界出来事誌（せんごかんごかいできごとし）

5.東京大学医学部衛生看護学科の発足

衛生看護学科のできた頃

福田邦三（ふくだくにぞう）

発端

昭和27年の夏の暑い最中だった。私は9月から先の講義の草稿の改訂を涼しい所でする計画をたて，長野県の戸隠（とがくし）村に家族ともども出かけていた。真夏に坂道を昇っても汗ばまないので，仕事をするにはもってこいの所であった。

ある日突然，東大の医学部事務室から電報がきた。臨時教授会の通知であった。なんのことやらわからぬままに，とにかく山を降りて，その日の午後の開会に間に合うように山の手線から大塚経由で都電で出勤した。

今でも覚えているが，その都電で沖中重雄教授に遇然出会った。隣同士で吊り革を握りながら，「一体何事が起きたのですか」と聞いた。私はもっぱら聞き役で，何分話が初耳であったので，一応の輪郭を理解するのに暇取り，電車を降りてからも，沖中教授室までついていき，一部始終がはじめてわかったというような始末であった。そして話の起こりは当時の分院長三沢敬義教授(故人)，臨床方面の空気は反対に傾いていること，基礎医学の諸君からの意見は，まだ聞こえてこないこと等であった。

教授会がはじまるまでに，三々五々教授たちが小集団で，それぞれ相談して賛成者・反対者・未決定者の票読みができているなどということが世間で取沙汰されていると聞いたことがある。しかし東大では，少なくとも，私がいたところはけっして行なわれていなかった。

人事についても，事柄についても，他の教授が教授会で説明をはじめられるまでは，私はその問題の可否について教授会以外の場であらかじめ自分の判断を決めておいて，他の教室にかかわることに発言することは堅く慎しむことにしていた。

教授会で三沢分院長が説明されたことは，私の記憶する限り次のようであった。

次年度の予算を組むに当たり，文部省は「単一の大学に2つの看護学校があるのは必要と認めず，分院付属のものを廃して本院付属のもの一本にする方針だ」と聞いた。どうしても廃するというなら，いっそのこと外国に多々あるような4年制の看護大学を試しにつくってみる気はないかと応じたところ，当時の大学課長H氏は，それは面白い，一つ努力してみましょうという話になったという。

第2に，「この4年制の看護大学という考え方には，アメリカ駐留軍の看護当局も賛成しており，何がしかの助力をしよう」ということを日本の看護当局（当時の厚生省看護課長は金子光現衆議院議員）に私的に表明していること。

第3にアメリカのロックフェラー財団でも，この日本の計画に好意的である由，厚生省方面の耳に入っているということ。

上記はいずれも公的な意向表明ではないが，三沢分院長が，確かな情報と考えて，医学部教授会の，これに対する対応の仕方について審議してもらいたいということであった。

矢内原忠雄総長の意向を近日中にお尋ねする心算であると三沢教授は付言された。

この教授会は，いわば第一読会であって，諸教授から細大となく質疑があり，三沢教授が答弁された。当時の医学部長は中泉正徳教授であった。

東京大学の体質

東京大学は人も知るとおり日本では伝統の古い大学である。そして，とくに日本民族の体質として，その伝統に愛着をもつ傾向の強い大学で，かつてもあ

り，将来もあるのであろうと思われる。

そのなかに女子だけの窓口を設けることは当時，違和感と好奇の眼とで，大学の内外からみられた。

医学部で，医学科・薬学科とを包含しているのはまだわかるが，看護学科まで加えて三本立にする必要があるかというのが世間一般の考え方であったようである。

日本社会特有の目上・目下の関係が支配しているなかで看護学博士が将来出現するであろうことを考えるのは平均的日本人には無理であったであろう。

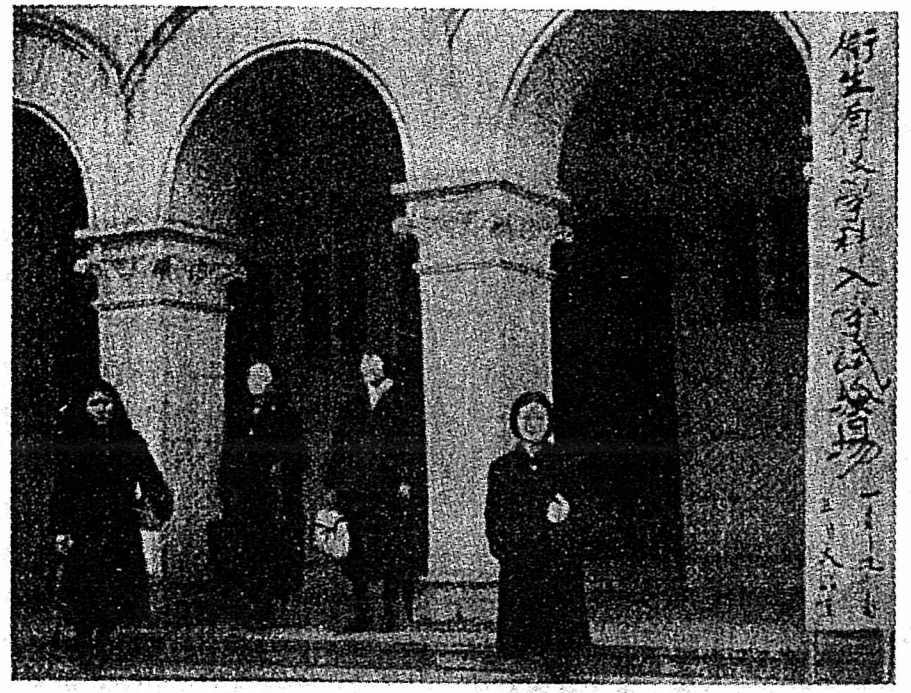
それでも，医学部教授会は一歩進んでいた。昭和28年度から衛生看護学科の新入生を入学させる窓口（女子専用）を第一年度計画として東大の駒場に設置することとなった。

学科課程は法規の許すだけにつくり，授業の進行につれて，しだいに改善していくという，東大慣行のフレキシブルな方式にした。どれだけのことを消化し得る対象，どれだけの要求を以て学を求める気迫があるか，相手が一向わからない。それゆえ，この科をつくりあげる仕事を託された者は，彫刻を刻む気持ちを棄てて，大きな樹の苗木を植え，日光と水と肥沃な土を与え見守るように，教師と学生とが相談し力を合わせて，この新しい学科を形づくっていこうと考えた。無責任といえばいえ，無定見といえばいえ，零歳の愛児を前にし，われら無経験の母親にできることは乳と愛だけなのであった。東大の伝統に，かつてなかった民主的型破りの無手勝流である。

必修ではなかったが，解剖室での見学も許された。ある日，私はその場にいなかったが，私が学生のとき人体解剖室の台に仰臥する解剖体の傍に立つときには，まず１人で体の構造を勉強させていただくことの許しと感謝との黙とうからはじめることにしていた。

衛生看護学科の一学生は，この室に入ると脳貧血を起こして卒倒した。この学生は，この後で教育学部への転入許可を願い出てきた。

私は教育学部長に私的に内意を伺った。「そういう事情ならなんとか考えてあげましょう」ということだったので，私は同様な希望者がほかにもあれば申し出るように求めた。私の印象では６～７人も転入試験を受けることを希望した。私は，その旨を教育学部長に報告した。すると，便乗者は困るといわれた。それももっともだと思ったので，私はこの問題については私の意見を述べないで引き下がった。彼氏は笑っておられたが，私は笑わなかった。人の子の健康について学んだ衛看の学生を，途中から小学校児童の研究と実践教育（Pédagogie pratique）とに振り向けたら，児童教育の進歩に役立つのではないかと真



第１回の衛生看護学科入学試験会場風景

剣に考えていたからである。

東大の教育学部が設置されるとき，東京では「教育の研究をする。教員の養成はしない」という方針だと伝えられたことを覚えている。これも東大の伝統であろう。私は人生の意味について私と意見の違う人とは，discussion（ある主題について意見の交換をすること）を日常的にはしないことにしている。

入学式から数カ月たち，医学部本館で教授会をしているとき，駒場から電話があり，「衛看の学生がパニック状態になり，動揺している」ということで，私たち（というのは三沢教授と薬学の秋谷七郎教授が同車してくださったからである）は駒場へ車で急いだ。

いってみると，学生としては無理もない事件が起こっていた。

その１つは，同じ駒場の男子学生が「君たちは卒業したら，どんな職業につくのか？」と聞いたので，「看護婦」と答えたら，「なあーんだカンゴフになるために東大に入ったのか」といって軽蔑されて悲しくなったのである。他人，ことに異性からの評価に敏感な年頃である。

「君たちの命を護るために現代は高級な看護婦を必要としている」といってのける見識も度胸もなかったのである。これは，入学はじめに，われわれがオリエンテーションを駒場の全学生に向かってなすべきであった。われわれの失敗であった。

その2は，「保健婦に仕立てられて山奥の無医村で低い待遇で駐在させられるのだ」という将来像の風説が駒場のキャンパスに広がったという話である。

このほうの問題は簡単であった。私は一堂に集まった衛看の第1回生の諸君に，“われわれは山奥でも海岸でもいきたくない所へいくことはない。イヤなら断わればよい。国立大学で国費を注ぎ込んで養成されたからといって，将来の身の振り方まで国の指示を受ける約束はしていない”と啖呵を切ったら，みんな安心してくれた。

第1回生の諸君と昼飯

こんなことがあって，衛看の諸君は先輩もなく，相談相手もなくて不自由だろうというわけで，

(i) 駒場の角田義和教授にお願いして担任の仕事をしていただいた。

(ii) 毎日というわけにいかないが，できるだけ回数多く私が昼飯を駒場のホームルームで一緒に食べることにした。たいていは田舎饅頭か大福餅で片づけた。しかし女性同士と違って話ははずまなかった。

この後，学生諸君は，こだわりなく授業を受けて，2年目の途中から語学だけは駒場で続け，残りの部分の科目は小石川分院で基礎・臨床の諸先生にお願いすることになった。

この頃にロックフェラー財団の China Medical Board の予算に組んであった5万ドルを，衛生看護学科の教材設備費として寄贈を受けた。

私の学習経験から，早い時期に組織学の講義と実習（標本をみながらの学習）をさせるのがきわめて有効であることを感じていたので，顕微鏡を必要数だけ揃えた。

また湯槇教授は附属病院の大部屋の各ベッドの間に体裁のよい布張りのついたてをしつらえた。

以上その他の費用は上記ロックフェラー財団の援助のおかげである。

このことおよび全般にわたり，このわれらの改善努力の試みに対し Oliver R. McCoy 氏および Dr. Virginia M. Ohlson 嬢の心のこもった助言と支援に心からの感謝を捧げる。

（東京大学名誉教授，山梨大学名誉教授）